

世界一伝わる土木広報のススめ

——デミーとマツが注目されるワケ——

出水享 正会員 長崎大学 大学院工学研究科

土木広報の救世主!?

『噂の土木応援チームデミーとマツ』（以降デミーとマツ）は、筆者であるデミーと、マツこと松永昭吾氏が2016年4月に結成したコンビ（図1）である。二人とも土木技術者で博



図1 デミーとマツのロゴ

士（工学）である。40代後半以降の方はお気づきかもしれませんが、お茶の間を騒がせた伝説のテレビドラマ『噂の刑事トミーとマツ』（1979～1982年）の人気にあやかっただけの名を付けた。デミーとマツは、普段の生活や学校では学べない土木体験を通して『土木の使命と価値』を楽しく伝える活動を行っている。なお、活動はボランティアである。結成して4年間（2020年4月1日現在）に九州各地で24回の体験イベントを実施し、1000名以上が参加している。デミーとマツが主催するイベントは毎回定員以上の申し込みがあり、リピーターも多い。関西、関東、甲信越地方か

らの参加も過去にはあった。今まで300件以上のメディアに取り上げられており、約15分のテレビ番組を組まれたこともある。また、土木学会からは土木広報大賞2018優秀部門賞、2019準優秀部門賞を受賞している。これらの実績からわれわれのことを『土木広報の救世主』と呼ぶ人も多い。そのせいか、最近ではイベントの依頼・相談、講演依頼が殺到している。

伝わる土木広報のススめ

現在、全国各地で見学会・体験会などのイベントが精力的に行われている。ただ、誤った伝え方をしているイベントを多く見かける。伝え方を

間違えてしまうと土木のイメージが悪くしてしまうことがある。「伝える」と「伝わる」は大きく異なり、「伝わる土木広報」をしなければならぬ。デミーとマツはイベントの都度、「伝わる土木広報のPDCAサイクル」を回してきた。その中で「伝わるコツ」が徐々に見えてきた。ここでは、デミーとマツが実践している「デミーとマツ式伝わる土木広報」について、その一部を紹介する。詳細は参考文献に記載しているのでそちらを参照してほしい。

ターゲットは子供

子供を対象にしたイベントでは、親もしくは保護者が必ず参加する。最近では子供の就職を親の意見が左右することが多いことから、親にも土木の

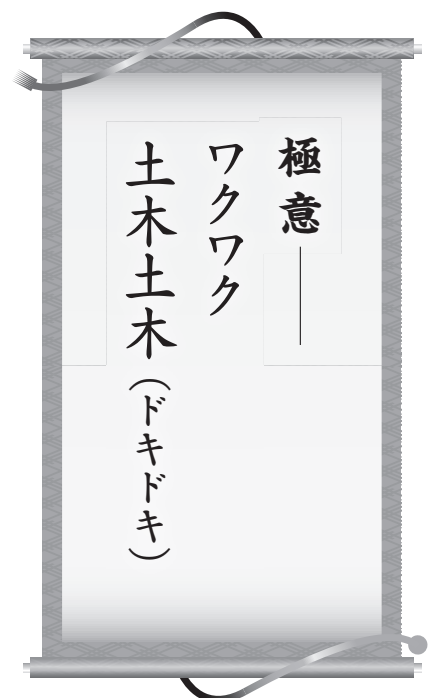




写真1 法面でのモルタル吹付体験

使命と価値を伝える必要がある。子供は宣伝マンとして大活躍する。子供をワクワク土木土木（ドキドキ）させることができれば、イベントを終えたあとに家族や学校の友達に土木体験の自慢をするため、多くの人に土木の魅力を伝えることができる。

リアルな現場で仕事体験

工事現場でイベントを開催することによって、大きさ、空気感、匂い、音、振動など五感を通して伝えることができる。また、誰が何のために、どのような仕事をしているのかを伝えることができる。さらに、現場で仕事体験（写真1）をさせることで、働く

人の気持ちを身体と心で受け止めて土木の仕事をより身近なものに感じてもらうことができる。

プロの手ほどき

体験イベントは「体験」と「プロによるデモンストレーション」をセットにする必要がある。初めて体験する参加者は必ず失敗する。しかし、プロが簡単に手ほどきを披露すると歓声とともに拍手が沸く。テレビでプロ野球選手やプロサッカー選手の活躍を見て憧れるのと同じであり、「かっこいい！」や「すごい」は、「憧れ」への第一歩になる。

イベントは少人数

参加者が多数いると説明などが一方的になりがちで、参加者との距離感が縮まりにくい。一方、少人数だと双方向のイベントができるため、距離が縮まり信頼関係を築きやすくなる。信頼関係を築けると伝えたいことが伝わりやすくなる。少人数だと一人あたりに費やす体験時間を長めに設定でき、参加者全員が十分に満足できる体験が可能となる。

第三者が主催

発注者や受注者が主催者となって土木の必要性や大切さを説明しても

自画自賛になる場合もあり、説得力に欠ける。一方、デミーとマツのような第三者的な立場の人間が主催者として説明することで参加者からの共感を得やすくなり、伝わりやすくなる。

伝えたいことを絞る

説明したいこと、見せたい場所や場面がありすぎて、すべてを実行することが多い。情報量が多すぎると、何を伝えたいのかが分かりにくくなる。また、見る場所が多いと、滞在時間が短くなり、十分な説明ができなくなることや移動ばかりが増えて参加者が疲れてしまう。伝えたいことを絞り込み、イベントを組み立てることが大切だ。

土木の風を吹かせる

デミーとマツの活動はボランティアで行っているため、活動の幅に限りがある。そのため志を共にする仲間が必要である。現在は「第2、第3のデミーとマツ」の育成に力を注いでいる。具体的には、①デミーとマツ・マインドを植え付けるための講演活動、②伝わる土木体験イベント

のプロデュースならびに指導である。その成果として2019年4月に九州地方整備局広報官・広報担当者会議、同年11月に中部地方整備局が中心として発足した産官学連携広報プロジェクト「あいち土木の魅力・未来プロジェクト」、同年12月には東京で開催された全国建設青年会議第24回全国大会、2020年3月には秋田県建設業協会のリーダー研修などにおいて講演を行った。

今後は土木広報のトップランナーとして「土木で働く人が誇れる職業に、子供たちが憧れる職業に」を目標に全力で土木業界を応援していくとともに、全国に「土木の風」を吹かせて土木ファンを増やしていきたい。応援をよろしく願います。

参考文献

- (1) 出水亨「土木の使命と価値の伝え方―デミーとマツ式伝わる土木広報―」（二社）九州地方計画協会九州技報No.66、110頁、2020年3月

（担当編集委員・三村陽一）

DEMIZU Akira

1979年福岡生まれ。軍艦島3Dプロジェクトでグッドデザイン賞2016、インフラ構造物の検査技術で国土交通大臣表彰国土技術開発賞創発技術賞2016、土木学会土木広報大賞2018優秀部門賞、2019年優秀部門賞、土木（工学）。

